

## 筑波大学陸上競技部 関東インカレ女子 20 連覇の背景

大山卞圭悟\*

### University of Tsukuba Track & Field Team Women's Section:

#### — A Background of 20 Years Successive Championships —

OHYAMA BYUN, Keigo\*

#### 1. はじめに

本学陸上競技部は、2010年、20年連続で関東インカレ（関東学生陸上競技対校選手権）女子総合優勝（22回目）を達成した。日本インカレ（日本学生陸上競技対校選手権）においては4年連続の優勝（22回目）であった。コーチの一員としてチームの活動に関わる筆者としては、普段意識するのはチームの強さというよりは弱さの部分であることが多く、それをいかに改善するかという視点への意識の方が強い。そのため、チームの強さの背景について論ぜよという依頼にはいささか当惑したというのが正直なところである。身内が、自分の関わるチームの長所を論ずるとなると、「手前味噌」のそしりを免れないであろう。しかしながら、日々移り変わる競技環境の中で、この機会にチームの現状やこれまでの成り立ちを振り返ることで、今後の更なる発展に役立てたいと考え、依頼をお受けし、筆を執った次第である。ここでは本学陸上競技部の現状について、これまでの歩みやチームの特徴を関連づけて、可及的客観的に報告していきたい。

#### 2. チームの現状

筑波大学陸上競技部は「インカレ男女アベック優勝」をチーム目標に掲げて活動している。学群一年生から大学院生まで、常に200名強の部員を擁する陸上競技部であるが、女子はその約4分の1を占める。チームにおけるトレーニングからチーム内の役割分担にいたるまで、活動は基本的には男子部員と同様で、特に女子部として独立した活動をしている訳ではない。競技部特有の部内委員会やマネジメント組織も男女共通であるが、競技部の副主将を兼ね、女子全体を統轄する女子主将が毎年最高学年か

ら選出される。

高校時代に全国レベルの大会で活躍し、推薦入試で入学する陸上競技を専門種目とする女子学生は、例年およそ5名から8名程度で、推薦入試の制度を持つ他大学に比較して著しく多いとは言えない。対校試合の主力は推薦入学を経た彼女たちになるが、もちろん、一般入学の学生が在学中に力を付けて活躍することも多い。好例として、2012年の全日本大学女子駅伝3位入賞メンバー6名のうち、実に4名が一般入試による入学者である（3名が体育専門学群、1名は人文学類）。このことは、本競技部が単に入学段階で競技力の高い者が集まっただけの集団ではないということを示している。

一方、2012年日本インカレにエントリーした選手66名（大会最大人数）中、女子は35名であった。35名のうち確認できただけでも、実に14名が高校時代に本競技部出身の指導者や両親からの薫陶をうけていた。このような現状から、インカレでの活躍の背景には、長年にわたる本競技部出身の先輩方の信頼と愛情に満ちた関与が大きいことは明らかである。

インカレに向けての取り組みとともに、国際的な競技力を身につけていくこともチームの重要な一つの柱として考えている。日本の学生陸上競技では、常に一定の成績を収めている本学陸上競技部であるが、ひとたび国際的（とくに世界レベル）な競技力へと視点を移すと、活躍は限定的である。世界レベルの競技会に出場した最近の例は、小西祥子（2004卒；2008北京オリンピック出場）、岡部奈緒（2011卒；2011世界選手権テグ大会出場）らが挙げられるが、在学中の学生の活躍はそこまで至っていないのが現状である。

\* 筑波大学体育系 陸上競技部副部長  
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

### 3. 連覇への歩み

図1は陸上競技部の女子に関するインカレ成績の変遷を示したものである。インカレの総合順位は、個別種目の順位に応じて、現在は優勝者に8点、2位に7点という形式で、8位に1点が与えられ、その得点のチーム合計で競い合う。1974年筑波大学として初めて出場したインカレでは、関東でかろうじて8位であった。その後3年目以降は関東・日本両インカレで常に8位以内を維持するようになった。1980年代中盤からは急速に躍進し、1988年には日本インカレで初優勝、1990年には両インカレにおける優勝を果たす。

それではこの間にチームの力を高めるブレイクスルーがあったのだろうか？ 実はこの時期、男子が常に総合優勝争いに加わり好成績をおさめていた。1980年から1987年の間に陸上競技部は男子が、実際に関東インカレで4回、日本インカレでも2回の総合優勝を果たしている。このように見ると、女子が

連覇への準備を整えた背景には男子の強さがあったと言えるだろう。練習相手でもある男子の強さは、身近な目標を高いものにし、現在においても大きな刺激となっている。また、全日本大学女子駅伝が初めて開催されたのが1981年ということもあり、女子を男子と同様に強化していく機運が高まったのもこの時期だったのではないかと推察する。

### 4. 他大学の現状

前述のように、インカレの総合順位は、個別種目の順位に応じて与えられた得点のチーム合計で競い合う。したがって、チーム競技力はもちろんであるが、他大学との相対的な競技力が順位を決定する。関東の大学では、箱根駅伝偏重の傾向も否定できず、女子のトラック&フィールドはそのあおりを食って軽視されている現状もある。表1、表2は平成に入ってからのインカレ総合得点上位校の内訳で

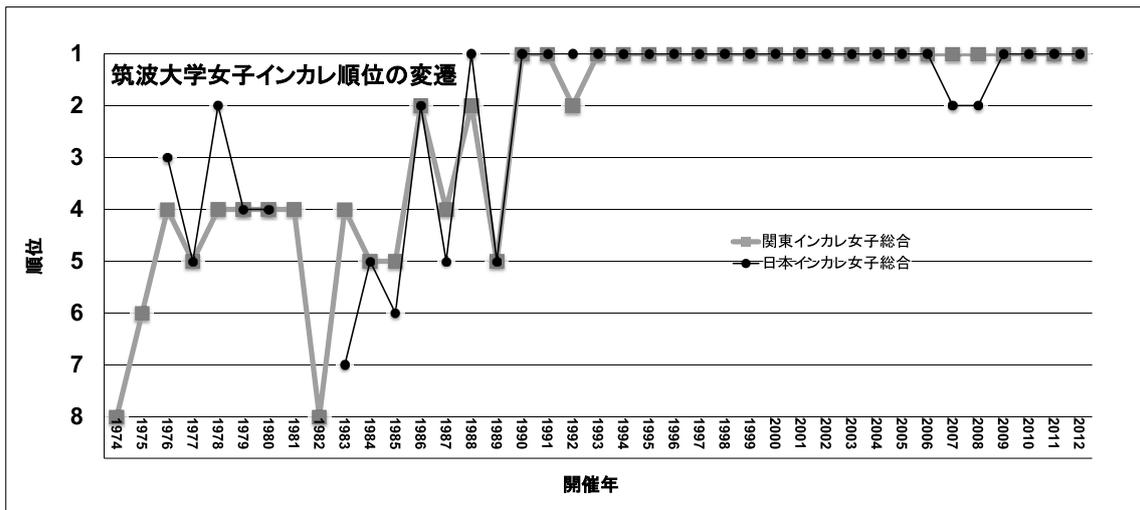


図1 筑波大学女子総合インカレ順位の変遷 (1974-2012)

表1 平成元年 - 24年 関東学生陸上競技対校選手権 (関東インカレ) 女子上位校得点と順位の変遷

平成	1位	2位	3位	4位	5位	6位
1	日体113	東女115	中大103	日女84	筑波70.5	日大33
2	筑波148	東女111	日体89	中大56	日女50	-
3	筑波136	東女110	日体86	中大76	日女74	-
4	東女120	筑波107	中大101	日女82	日体69	-
5	筑波148.5	日女134.5	中大96.5	東女84	日体67.5	東学40
6	筑波151	東女119	中大96	日女89	日体66	東学40
7	筑波136	東女99	日女87.5	日体79	中大78	国士46
8	筑波154.5	中大122	東女96	日体72	日女63	東学48.5
9	筑波154	中大90	東女85	国士62	日女50.5	東学50
10	筑波173	中大82	日女60	東女58	順大50	国士42
11	筑波183	東女76	東学73	中大61	日女51	国士45
12	筑波180.5	東学87	中大86	東女61	国士59	日女61
13	筑波179	中大98	東学86.2	日女61.2	日体51.2	国士47.5
14	筑波161	日体100	中大99	東学91.5	日女60.5	国士43
15	筑波184	中大78.5	日体74	東学88.5	東女64	国士62
16	筑波118	日体大89	順大82	日女体76	中大61	国士62
17	筑波170	日体118	順大82	日女69	国士48	東学47
18	筑波182	日体141.5	日女65	中大63	順大54.5	国士49
19	筑波100	日女89.5	日体86	中大76	順大58.5	早大46
20	筑波135	中大98	日女63	日体62.5	-	-
21	筑波161	中大119.5	順大86	早大56	平国46	国士42.5
22	筑波146	中大128	日体74	順大88	国士64	平国61
23	筑波145	中大133	日体82	平国41.5	国士40	順大39.5
24	筑波176	中大133	国士87	東学57	早大53	順大46.5

<略称>日体:日本体育大学, 東女:東京女子体育大学, 中大:中央大学, 日女:日本女子体育大学, 日大:日本大学, 東学:東京学業大学, 順大:順天大学, 国士:国士堂大学, 早大:早稲田大学, 筑波:筑波大学, 平国:平成国際大学, 青学:青山学院大学, -:不明

表2 平成元年 - 24年 日本学生陸上競技対校選手権 (日本インカレ) 女子上位校得点と順位の変遷

平成	1位	2位	3位	4位
1	東女70	中京63	中大82	日体60
2	筑波105	東女67	日体66.5	日大46
3	筑波90	東女87.5	日女74	中大51
4	筑波86	中京74	東女64	日体54
5	筑波84	福大87	中京86	日女60
6	筑波85	中大76	福大86	中京61
7	筑波101.5	中京89.5	日女69.2	東女66
8	筑波115	中京76	中大50	東女41
9	筑波119.5	中大48	日女49	中京44
10	筑波131	国士51	中京45	日女43
11	筑波150.5	中大37	東学45	国士41
12	筑波95	福島74	東学52	国士42
13	筑波143	福島74	福島67	日女42
14	筑波128	福島70	福島67	日女39
15	筑波129.5	福島74.5	中大56.5	立命54
16	筑波85	福島77	日女51	立命43.5
17	筑波85.5	福島67	日体54	福開50
18	筑波107.5	福島73	日体59	日女53
19	筑波66	筑波84	中京53.5	中大44
20	福島61	筑波81	中大58	中京52
21	筑波81	中大70	早大50	平国39
22	筑波81	立命54	中大50	中京47.5
23	筑波106.5	中大82	東大坂47	日体30
24	筑波120	中京72	中大57	順大53

<略称>福大:福岡大学, 中京:中京大学, 福島:福島大学, 立命:立命館大学, 東大坂:東大阪大学

ある。特に 1980 年代は女子の在籍数が多い、体育学部を持つ大学の活躍が目立っていたが、徐々にその内訳は変化している。現在上位を占めている大学は、総合的にトラック&フィールドに力を入れている大学で且つ男子の競技力も高い大学と、明確にトラック種目重視のチームに限られている。筑波大学は総合型のチームで男子の競技力も高く、トラックでもフィールドでも得点ができるという特徴があると言ってよいだろう。トラック&フィールドを標榜し、駅伝も含めて走跳投全体を大切にしていこうという明確なスタンスが筑波大学の特徴であるが、このような姿勢が、他大学の変化に影響を受けにくいチーム力を生んでいると考える。

## 5. 指導者

筑波大学陸上競技部の活動は学生の自治のもとに、基本的には学生の自発的な活動によって成り立っている。確かに、このチーム全体に、とくに誰に押し付けられるでもなく、自発的にトレーニングに取り組むことは当然という土壌があり、そのような学生の姿は途絶えたことが無い。これはひとえに学生諸君の高い目的意識と努力をいとわない態度が源泉であり、競技力の基本となるものである。とはいうものの、競技力を語る上で、避けて通ることができないのが指導者の影響である。陸上競技部の指導スタッフは、現任部長が 1 名、コーチが 5 名（いずれも教員）。大学院生のコーチアシスタントが 2 名、チームドクターが 2 名（内 1 名が教員、1 名は卒業生）という体制である。

コーチである教員スタッフうち 2 名は陸上競技を専門研究領域としているが、3 名はそれぞれ陸上競技以外の領域を専門としている。この点も他大学はもとより、学内の運動部においても特殊であると言えるだろう。学内で教職に就いている陸上競技部出身者は現時点で 16 名（平成 25 年 2 月現在）にも及ぶ。チームスタッフ以外のこれら先輩方には、OB 会の対応も含め、物心両面で学生諸君の支えとなっただけでなく、常に手厚い支援をいただいている。この他にも、社会人チーム等に所属しながら競技を継続している卒業生が複数、プレイイングアドバイザーとして身近に活動し、合同練習を行っている。このことも学生諸君には高いレベルの競技を意識し、学ぶ良い影響となっているであろう。

本競技部のコーチは便宜上それぞれ主に担当する専門種目があるものの、学生はいずれのコーチからも指導を受けることができる。実際、投擲専門の学生が短距離を得意とするコーチからスプリントに関するアドバイスを得たり、跳躍専門の学生が投擲を

得意とするコーチからウェイトトレーニングの指導を受けるような事例である。このように恵まれた学生サポート体勢のもと、筆者が平成元年に入学して以来、グラウンドに指導者が誰もいない日というのはほとんど皆無である。この点は、貢献を客観的に評価することはできないが、このように「指導者が毎日グラウンドに足を運ぶ」そしてそれを続ける、ということが、学生が安心して競技に取り組みチームの安定を図る上では最も大切なことではないかと考えている。筆者自身も、トータルで大学において過ごす時間がもっとも長い場所はグラウンドであり、自らが学ぶべきこと、成すべきこと、その成果、全てが競技の現場にあるのだと信じて疑わない一人である。

## 6. まとめ

コーチングにおける対象や課題の単純化と統合化は局所的なチーム運営のコストを減らし、一時的に効率的にチーム力を高めることがある。反面、システムの冗長性が損なわれるため、局所に生じた致命的な問題は即全体の破綻へとつながりかねない。筑波大学陸上競技部は、男女ともに、トラック&フィールド全体を、推薦入試のみに頼らず、長い時間をかけてというように、あえてコストが高く効率の悪い選択肢を選んできた。現状は、これまでのところ、このようなチームの特性が生み出す利点が、辛うじて他大学を上回っているに過ぎない。どの世界でも同様だが、右肩上がりの成長が永遠に続くことは無い。これはチームとて同じこと。伝統は守らなければならないが、変化を恐れては進歩が無い。今後は現在の基本方針を崩さず、国際的に活躍できる競技者の育成にもつなげていくことが一つの大きな目標である。そしてもう一つ、これは運動部としての最低条件であるが、立派な社会人を育てていくこと。この点については、これまでと変わらずに取り組んでいきたい。

学生の中には、生物学的な成長期に当たる、中学・高校時代の競技力の急速な伸びと、大学に入ってから停滞のギャップを受け入れられず苦しむ者。高いパフォーマンスの代償として、大きな怪我とたたかう者。競技者であることと人間として女性としての理想の生き方との軋轢に悩む者。数えきれないほどである。そのような夥しい数の苦悩と、日々努力の積み重ねの末に連覇の記録も成り立っているのだということを、それらに寄り添うことを生業とする者として、あらためて確認しておこうと思うのである。